途半端に建築的知識を教える研修があるためケアマネジャーの苦手意識が生まれる」というものがあった。この最低限知識の位置づけに統一性がないため、講義によっては専門性高く、ケアマネジャーが苦手と思ってしまう、また複数の研修を受講した者が混乱する恐れもある。

ケアマネジャーの質のばらつきや格差があるため、ケアマネジャーの経験年数やバックグラウンドに合わせた研修が必要であるとの指摘もあった。

(9) 望む教材

研修で利用したい教材を尋ねたところ、身体機能と福祉用具、建築との適合を受講者に体感してもらえるもの（例えば手すりの取り付け位置の変更できる装置、径の違う手すり、ミニスロープなど）が挙げられた。既に自ら作り使用している講師もある。手すりの取り付け位置を確認できるものを、本研究でも本年度製作したが、安全性を考慮すると大掛かりな設備となり、持ち運びが困難である。

また、体験演習を行う研修会場には、車いすやその他の福祉用具を借りることの出来る機器センターや工房のあるところが望ましく、なければ借りてきてもらう、持参するという講師もあった。これらから体験を行う研修会場を選ぶ際の注意事項の１つである。

改修事例データとして、施工前後写真と、身体機能等のプロフィール、関係者の声（利用者と家族、ケアマネジャー、施工者など）を掲載した事例集、また失敗事例を集めた事例集があると良いとの回答もあった。

事例検討のグループワークの教材として、対象者の状況が分かるビデオ（家屋状況、身体機能など）と図面、福祉用具や家具の寸法のわかるもの（図面）が揃ったものを望むとする講師が３名あった。また、使いやすいテキストとそのテキストに合ったパワーポイントデータやビデオがあると良いと回答した講師があった。特に自分の専門外の部分を説明しなくてはならない、例えば単独講師で住宅改修と福祉用具の研修を行う場合などに便利だと思われる。

福祉用具プランナー研修の改訂前テキストの作成時に、指導ポイント整理表を併せて作成し、指導者研修を行っていたという。この指導ポイントには、指導目標やＯＨＰで見せる項目、補助教材などが示され、テーマごとに時間配分まで示されている。しかし、講師は自分の作った資料のほうが使いやすいようでテキスト自体をあまり利用していない場合も多く、それほど活用されなかった。

(10) その他意見

その他、自由な意見を尋ねたところ、「ケアマネジャーのスキルアップだけでは問題解決にならない、関係専門職を育て、連携できるシステムづくりを行うことが必要」「良質な建築技術者を育てることが必要」「住環境をアセスメントするケアマネジャーが少ない、ケアマネジャー研修で必須科目とするべき」などが挙げられた。

(11) まとめ

講師に対するアンケートでは、講師は住宅改修に関して、ケアマネジャーは多職種をマネジメントすることが本来の業務であり、建築の専門知識は必要ではないと思っていることが分かった。しかし、マネジメントをする上でコミュニケーションを取れる程度の最低限の知識は必要である。そしてこの最低限の基礎知識が、講師のバックグラウンドによってかなり差があることも分かった。

これらのアンケートを通じて、講師が望む、また受講者の評価も高い住宅改修研修は、以下の内容のものであることが明らかになった。

① 連携、多職種とのコミュニケーション、マネジメントを学ぶことを目的とした研修。

② 多職種の受講生で意見交換をすることので

きる事例検討やグループワークなどの演習がある。

③ 複数の講師（福祉、保健・医療、建築、福祉用具）による基礎知識取得の講義がある。そして、これらのプログラムは、4時間以上（昼食を挟む1日研修）の日程で行うことが適当である。

住宅改修研修を担当している講師は、今回ご協力いただいた講師以外に数多く存在する。主催者側のアンケートで名前の上がった講師がこの講師側アンケートの回答者には少ないなど、回答者の選択に偏りがあることは否めない。しかし、23名の講師の考える研修の獲得目標や講義の内容、ケアマネジャーの役割などは共通する部分が多く、内容に偏りはないと思われる。

（参考）研修事例

ここで、連携を学ぶことを目的として、ロールプレイングによる事例検討を行った研修を紹介する。この研修は、これまでのグループワークによる事例検討とは異なり、関係専門職の役割を意識し、連携の意味と重要性を体感してもらうことを目的としている。

1)研修の課題と目的

2004年10月に兵庫県立総合リハビリテーションセンター家庭介護・リハビリ研修センターが「住宅改修アドバイザー研修」を行った（県健康生活部福祉局長寿社会課より委託)。研修の目的として「福祉用具・住宅改修に関する知識の普及を図るため、各市町職員や住まいの改良相談員等を対象として専門的な研修を実施する」とある。住まいの改良相談員とは、住宅助成事業における助成の決定にあたり現地調査を行い、対象者の身体の状態や住宅の状況に応じて、改造の必要性や緊急性等を評価し、予算の範囲内で計画的・効果的に事業を行う、福祉、保健・医療、建築の3つの分野から構成される専門職（チーム）のことである。住宅助成金の額は年々増加しており、県は「適正判断」をするためには、住まいの改良相談員のレベルアップが必要だと考え、この研修を行っており、今回で2回目である。昨年度の研修は3日間で、すべて座学であった。また講師と会場とのパネルディスカッションは、現場をあまり知らない市町担当職員が多く、発言や質疑も少なく、受講生の達成感や充実感をあまり感じることは出来なかった。

今回は前回の反省も踏まえて、講師とスタッフは、事前に打ち合わせを重ねた。講師は、前回とほぼ同じで、行政部分は県担当者、その他一級建築士2名、理学療法士、作業療法士各1名である。

受講者への獲得目標として、「受講者が全員参加できること」「市町担当者に現場のことを理解してもらう」「利用者・家族のニーズをいかに引き出すか」「他職種の立場を理解する」「中心的役割は誰が担うべきか」「どの段階で専門職の意見を聞くべきか」などが挙げられた。これらの目標を獲得するには、受講生全員が参加する研修であるべきと意見が一致した。

2) 演習方式について

ケアマネジャーが受講する実務研修では、チームアプローチの重要性を教えている。体験研修としてサービス担当者会議（個人に必要なサービス提供機関がチームを組んで、ケアプラン、サービス計画について話し合う）の進め方と体験演習をするプログラムがテキストに掲載されている[2)]。受講者を6～8人のグループに分け、利用者役、ケアマネジャー役、サービス事業者役、全体を見渡す観察者役と配役を決め、事例の資料をもとに、模擬会議のロールプレイング（役割演技法）を行う。それを後ほど振り返り、各グループで話し合い、全体で発表を行うというものである。配役を数回変わることで、利用

者は何を伝えたいのか、どのような聞き方がよいのかなど違う立場の理解に役立ったとの感想を参加者から聞き、今回の我々の本研修の課題と目的に合致したロールプレイングで事例演習を行うことにした。

3)研修の概要

研修の概要を以下に示す。

〈プログラム〉

1日目	行政説明
	問題提起スキット1
	建築基礎知識、見積書について
2日目	高齢者・障害者の身体特性
	チームアプローチについて
	問題提起スキット2
	事例演習・発表・講評

〈受講者〉

住宅助成の適正執行ということで、助成金支給に関わる市町の事務職が大半を占めた。

事務職	23	作業療法士	2
ケアマネジャー	7	看護師	1
介護福祉士	6	その他	3
保健師	5	未回答	1
社会福祉士	4	合計	52

〈資料：演習部分〉1冊のテキストとして配布

- ロールプレイング演習の趣旨
- 利用者（夫婦、別居子）のプロフィールとそれぞれの心の声（したいこと、遠慮など）
- 身体機能とＡＤＬ
- 家屋状況
- 図面：配置図（1：100)、平面図（1：50)
- シナリオ
  - 病院診察室にて
  - 病院総合相談室（ＭＳＷ）にて
  - 市役所介護保険課にて
  - 利用者宅での打ち合わせ
    関係者の自己紹介、外出について

〈演習の進め方〉

5～6名で一つのグループとした。職種が混在するように事前に決めておく。グループごとに重点を置いて話し合うテーマを決める。最初に自己紹介をし、メンバーの職種等を理解する。配役、発表者を決めてから、居宅サービスも含むケアプランを立てる。

4) 演習の様子

ロールプレイングによる研修は、2時間と短く、生活場面のすべてについて十分話し合えるか疑問であったため、グループで「外出」「トイレ」「入浴」のいずれかを重点的に議論してもらった。ただし、就寝場所と居室に関してはすべてのグループに共通で話してもらった。

業務で利用者と直接話をすることの少ない市町担当職員が多いグループは、どのように利用者の意見を聞きだしてよいのかというところから戸惑っていた。配布資料に図面があるために、「どこに手すりをつけますか？」とアセスメントをせずにすぐに工事内容に入るグループもあり、講師が各グループを回り、アセスメントの重要性やどの情報を得るべきかなどを説明した。

今回新たな取り組みとして、講師側から、事例の説明をスキットで行う際に、左片麻痺の利用者役を演じた理学療法士が、日常生活動作(杖で歩く、座姿勢から立ち上がる、車いすから立ち上がるなど）を実演した。これにより、受講者に共通のイメージが出来た。これまでも事例演習はしたが、日常生活動作を文字で示している場合が多く、身体機能の程度については特に共通認識が出来にくかった。

利用者役は事前に渡されたそれぞれの心の声～「ポータブルトイレは嫌だ(夫)」「車いすで外に出たくない(夫)」、「私一人では危なくて介助できない(妻)」など～が書かれたものがあったので、利用者の要望を伝えやすかったようで、利用者不在の事例演習より、方向性が決まりや

すく、比較的早い段階で議論が白熱し、このやり方は有効であった。しかし、演習前に配役を決めるのではなく、前日から決めておけばもっと役になりきれて、さらに深い議論ができたとの参加者の意見もあり、今後の参考にしたい。

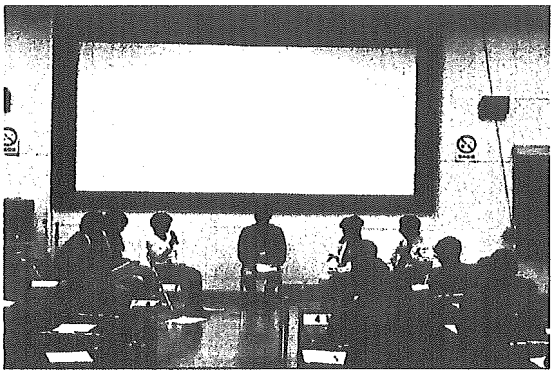

図１　問題提起スキットの様子

5)　グループ発表について

事例演習の結果を、各グループごとに発表をしてもらい、講師がコメントをした。

グループ代表者は書画カメラで改造案の図面を投影しながら説明するのだが、最初のグループはいきなり図面の説明から始めてしまったため、どうしてその場所に手すりが必要なのか、利用者と家族とどのような話し合いがありどうアセスメントしたのかという部分が抜け落ちてしまった。そこで次のグループからは、最初に図面を出さないように指示し、生活場面や身体機能、利用者と家族の要望などアセスメントについて話し合ったことを説明してもらった後、図面を使って改善案を説明してもらった。こちらの方が、どのようにアセスメントした結果のプランニングなのかがよく理解できた。各グループ 6～7 分くらいの予定が、どのグループも 10 分以上かかり、時間が足りなかった。これも次回への反省である。

あるグループの発表は、アセスメント、計画案のすべてが素晴らしい内容であった。改造内容については、数案をメリット･デメリット、コストの説明と共に提案され、制度利用に関する説明もあった。ここまでの内容がまとまった要因は、このグループの構成メンバーが作業療法士、保健師、建築士、市町職員と専門職がバランスよく入ったことにあるようだ。他職種の専門職が共に検討することの必要性を参加者も講師側も改めて認識した研修であった。

4.　まとめ

都道府県等、研修の実施主体に対する調査からは、以下の点が明らかになった。

① ケアマネジャーを対象とする住宅改修の研修は「福祉用具・住宅改修研修事業」または「介護支援専門員現任研修」として実施されており、前者は研修時間が長く、後者は短い。

② 研修の場所に、福祉用具や体験できるようなものを備えているところは少なく、研修で道具･用具を実際に利用している事例はほとんどない。

③ 主催者側が必要と考える研修の内容は、基本的な知識の習得や専門家との連携、具体例や実例の紹介、グループワークなどであり、受講者からは、実例・現場を知りたい、事例検討会を開催してほしい、などの要望がある。

④ 事例を紹介するもの（事例集、ビデオ、ＤＶＤなど）、住宅をイメージできる模型、体験コーナー、などの教材、道具・用具が必要とされている。

また、講師に対する調査では、講師のバックグラウンドや経験により回答に幅が見られたが、以下のような意見に集約できる。

① ケアマネジャーには建築の専門知識は必ずしも必要ではない。

② しかし、マネジメントのためには最低限の知識は必要である。

また、2 つの調査に共通して、現行の長時間

研修では、多職種交流を意図したグループワーク事例検討を行うケースが多く見られた。

これらの結果から、ケアマネジャーのための住宅改修研修は、マネジメントの習得を獲得目標の一つとし、多職種の講師による基礎知識習得のための講義と、多職種で意見交換できるグループワークや事例の検討を行うことが適当であると言える。そのためには最低4時間以上の研修時間が必要であろう。

昨年度および今年度の研究で、われわれは、ケアマネジャーの住宅改修研修の獲得目標として、「ニーズの発見やディマンズの確認・調整」を含めたアセスメント技術と設定してきた。今回の調査から、現行の研修では、マネジメント能力の向上が意識されていることが明らかとなり、われわれが設定した獲得目標はこれと方向性を一にしており妥当であることが確認できた。また、研修方法として、主催者・講師・受講生のいずれもが、事例紹介や体験型・参加型研修を望んでおり、ビデオや体験型装置の活用の提案は、これらのニーズを満たしていることも確認できた。

参考文献（文中に明示している資料は除く）

1) 糟谷佐紀、金　承喜他：住宅改修におけるケアマネジャーの支援体制のあり方に関する調査、学術講演梗概集（北海道）、1479-1482、日本建築学会、2004

2) 介護支援専門員実務研修テキスト作成委員会・編集：介護支援専門員実務研修テキスト、265-275、財団法人長寿社会開発センター、2004

注

[i] 介護実習・普及センターについては、http://www.angel.ne.jp/~kbf/soudankikan/zenkokucentre.html のサイトを参照した。都道府県・政令指定都市は、各自治体のホームページより検索した。

[ii] アンケートでは、90～120分程度のものを短時間の研修、1日または数回シリーズで実施しているものを長時間の研修とした。180分程度の研修については、短時間として回答してきたところと、長時間として回答してきたところが混在したが、これらについては、それぞれの主体で実施している研修の中の相対的評価で分類して回答してきたものと考えられる。このため、表1、表2では、明らかな誤答を除いては敢えて回答に修正を加えず、回答者の申告を優先して集計した。

[iii] 複数の資格を持っている人については、重複して数えている。施設長や大学教員など、肩書きから職種や専門性が明確にわからない人は不明とした。

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）
分担研究報告書

研修用媒体を用いた研修の試行と評価

分担研究者　蓑輪裕子（聖徳大学短期大学部専任講師）
主任研究者　鈴木　晃（国立保健医療科学院健康住宅室長）
分担研究者　橋本美芽（東京都立保健科学大学助教授）

要旨　本研究は、昨年度の研究の成果である研修用ビデオと、本年度に作成した動作の体験用小道具を用いてケアマネジャーへの研修を試行し、研修の評価およびそれらの研修用媒体の利用効果を把握することが目的である。研修は大きくは３種類あり、ケアマネジャーの役割、課題分析とケアプラン作成、異なる環境条件での動作体験である。それぞれ参加人数や時間など異なる条件のもと複数回実施され、研修後にはアンケート調査を行った。この結果、いずれの目的の研修でもほぼ９割以上が、「とても役立ちそう」あるいは「やや役立ちそう」と回答しており、研修は役立つと評価されている。しかし参加人数、グループワークの時間数、参加者の経験やグループ構成によりやや評価に違いが見られる。また課題分析を行う場合には、書き込みのしやすい記入用シートを用意すると、論点が明確になり相互に意見交換がしやすく、グループワークの評価が高まっている。そのほかさらに、これらの研修用ツールを用いた研修が地元講師のみで実施できる可能性を検討した。それによると、ビデオ活用の研修目的、活用マニュアル（資料）等が提供されれば、それぞれの研修主体の獲得目標や時間配分などに応じて研修の実施計画が立てられる可能性は高いものと考えられた。またアセスメント技術の向上に役立てるためにロールプレイを取り入れるなど、独自の目標を設定して研修内容を工夫し、ビデオを有効に活用している例も見受けられた。

１．研究の目的

本研究は、ケアマネジャー向け住宅改修研修を試行し、参加者による評価を把握・分析することで、当該研修の内容や方法を検討することを目的としている。またその際、昨年度の研究の成果である研修用ビデオ「ケアマネジャーに必要な住宅改修アセスメント技術」第一巻および第二巻と、今年度に作成した動作の体験用の小道具を用いて研修を行う。これらの研修用ツールの利用を通じて、それらの利用の効果を確認すると共に、ビデオの内容や体験用小道具の利用の仕方等に関して検討を加え、より効果的な研修のあり方を考察するものである。またさらには、これらの研修用ツールを用いた研修が地元講師のみで実施できる可能性を検討し、各自治体に対してケアマネジャー向け住宅改修研修の普及をめざすものである。

２．研究の方法

ケアマネジャー向けの住宅改修に関する研修を、大きく３つの内容に分けて実施した。すなわち、A.ケアマネジャーの役割（ニーズの発見およびニーズとディマンズの調整）に関する研修、　B.課題分析とケアプラン作成に関する研修、C.生活動作と住環境の関連に関する体験型研修である。A、Bの研修は、昨年度に作成し

た２本の研修用ビデオを用いてグループ討議形式で行ったほか、Ｃの研修は、手すりの位置やいすの高さなど異なる環境条件を体験できる道具を製作し、理学療法士の動作に関する講義と合わせて、それらの道具を用いて動作を体験する研修を行った。Ａの研修は千葉県松戸市、福島県、富山県の３箇所で行われ、Ｂの研修は宮崎県の宮崎市、延岡市、および千葉県佐倉市の３箇所で行われた。また佐倉市では、合計３回の研修を連続的に行っており、第１回目にケアマネジャーの役割等に関する講義、第２回目に体験型（Ｃ）研修、そして第３回目にケアプラン作成のための演習（Ｂ）研修が行われている。それぞれの研修の日時や概要は表１の通りである。各研修の終了後には参加者へのアンケートを行っており、若干細部が異なる部分があるが、おおむね同じ内容の調査票を用いた。異なる条件下で行われた研修内容の評価を比較、分析することで、より効果的な研修を行うための基本的条件や研修の内容を検討する。さらに、グループワークの際に用いた記入用紙を回収し、その記入内容を整理して、グループワークで話し合うべき項目や、グループワークを実施する際の留意事項等を見出す。

またこれらの研修の試行と評価とは別に、北海道内で協力を得られた支庁に独自に主催する形でこれらのビデオを用いた研修を行ってもらい、その内容と効果を把握した。これにより、これらの研修用ツールを用いた研修が地元講師のみで実施できる可能性の検討を行った。

３．ケアマネジャー向け研修の試行とアンケート調査の結果

１）研修目的別の評価

研修の目的や内容は大きくＡ.ケアマネジャーの役割に関する研修、　Ｂ.課題分析とケアプラン作成に関する研修、Ｃ.生活動作と住環境の関連に関する体験型研修、の三つに分けられたが、まずこれらの目的別に参加者の評価を比較する。研修全体がケアマネジャー業務に役立ちそうか聞いたところ、Ａ～Ｃのいずれの目的の研修でもほぼ９割以上が、「とても役立ちそう」あるいは「やや役立ちそう」と回答しており、おおむね研修は役立つと評価されている（表２、３、４）。またそのうち、「とても役立ちそう」と答えた割合は、Ａでは46.8%～58.8%、Ｂでは47.6～59.4%、Ｃでは46.7%であった。つまり研修の目的による差異はほとんど見られず、いずれの研修も同じ程度に評価されていた。なお、講義とグループワークを別の日に行った佐倉市では、講義型の研修に限定した評価アンケートも行ったが、その結果では「とても役立ちそう」が68.4%と多く、講義型の研修もケアマネジャーの基本的役割を学ぶ上で高い評価を得ていることがわかる（表４）。

２）ケアマネジャーの役割に関する研修（Ａ）の評価

Ａタイプの研修は松戸市、福島県、富山県の３つの地域で行われたが、各地域ごとに比較すると、福島県の評価がやや高くなっている（表２）。その理由として考えられることをあげると、まずはグループワークにかける時間数が異なったことがある。いずれも利用したビデオは第一巻であるが、ここには三つの話が収録されており、第一話：初回訪問からニーズを発見する　第二話：専門職との連携　第三話：継続的な関わりの中で、という異なる事例から、本人の要望であるディマンズと専門家が判断するニーズの発見・調整の場面を学べるようになっている。福島県では約120分をかけて第一巻に含まれる３つの話のすべてに関する討議を行ったのに対し、松戸市では約100分しかとれず、第三話の後半は十分な議論の時間がとれなかった。また富山県では時間が約70分と限られていたため、

第一話、第二話に関するグループワークしか行わず、第三話については視聴しなかった。

次に原因として考えられるのは、参加人数の違いである。松戸市は約80名、富山県は約150名と大規模な研修であったのに対し、福島県はグループワークへの実参加者が約50名とやや少なかった。このため講師の話やビデオ映像を聞いたり見たりしやすく、討議に入りやすい雰囲気があったことが考えられる。そのほか、各班のグループワークの司会を福島県では市町村の職員が担当したことも円滑なグループワークの進行に役立ったと思われる。

グループ討議に関する感想を地域別に比較したものが表7である。全体的な傾向としては、「ケアマネ業務のあり方を考える機会になった」とする人がいずれの地域でも約6割おり、「他者の意見や考え方が参考になる」も約6割～7割を占めている。グループでの討議が個々の取り組みを見直す上で参考になっていることがうかがえる。また「住宅改修研修としてはものたりない」「事例の共有化が図れない」などの批判的な意見も2割に満たないが存在している。

ただしいずれの項目も地域差があり、富山県は全体的にやや評価が低い。この原因としてはやはり時間的な制約が考えられ、「議論する時間が不足」が約3割と他の地域よりも多かったことにも表れている。また富山県の研修参加者は実務経験一年未満の者がほとんどであったため、グループワークでの体験に基づく意見交換も活発化しづらかったと考えられる。

一方、「住宅改修研修としてはものたりない」とする人は、富山県、福島県ではいずれも5.9%に過ぎないのに対し、松戸市では16.5%とわずかだが多い。松戸市で「ものたりない」と感じた人の特徴としては、1回目のケアマネジャーの役割に関する講義に参加していない人が多いほか、この1年間の経験件数が10件以上と多い人、および経験が0件と少ない人がやや多くなっている（表17-1）。富山県や福島県では講義と演習を同じ日に行っており、両方に参加できたが、松戸市では半日研修を2回に分けて行い、1回目を講義、2回目を演習としたために、講義を聞かずに演習に参加した人が半数以上を占めている。このため、他の地域に比べてものたりないと感じた人が若干多かったものと思われる。また経験が多い人は、さらに具体的な事例検討を行いたいと考えているほか、経験のない人も、住宅改修の手法等を具体的に学びたいと考えている様子がうかがえる。そのほか、保有する資格や、現在のケアマネジャー業務の内容（専任、兼任）別に評価を比べたが、地域ごとに傾向が異なっており、はっきりとした特徴は見られなかった。ここでは松戸市のクロス集計表を掲載するが（表17-1、17-2）、他の地域もこれに類する状況であった。なお松戸市の研修で「ものたりない」と回答した人でも、研修全体の評価としては、業務に「とても役立つ」「やや役立つ」とした人が合わせて9割以上を占めていた。

研修効果を把握するために、住宅改修への関わりかたについて考え方が変わったかどうか聞いたところ、「住環境の視点からのアセスメントの必要性を感じた」が約7割と多く、「ケアマネジャーが住宅改修に関わる意義をより感じた」が約5～6割、「ケアマネジャーの役割がはっきりした」が約4～5割である（表11）。ただし、「住宅改修に積極的に関わろうと思った」は約1～4割、また「住宅改修に関わる負担感が減少した」はいずれの地域でも約1割であり、多忙な業務の中で、負担感の減少や積極的な姿勢にはなかなか結びつかないことが見受けられた。松戸市では住宅改修に積極的に関わろうと考えた人が約4割と比較的多いが、考え方が変わらない人も約2割と多く、同じ内容の研修でも経

験、捉え方等により反応にばらつきが見られる。

グループごとに比較すると、全体の評価、および各項目ごとの評価は大きく異なっており、いずれの地域でも同様である（表 17－1、17－2）。たとえば研修全体の評価を「とても役立ちそう」と答えた人の割合をグループごとに見ると、松戸市 20～75%、福島県 16.7～100%、富山県 16.7～83.3%とかなり幅がある。そのほか「積極的に関わろうと思った」人の割合も、松戸市 12.5～66.7%、福島県 0～42.9%、富山県 0～60.0%とグループにより分散している。グループごとの討議により、研修の評価や今後の取り組み姿勢に大きな違いが生まれていることがわかる。十分な討議ができるか否かは班のメンバー構成に負うところが大きく、経験年数や所属など、できるだけ均等なグループ分けを行うことが必要かもしれない。ただし、参加者はそれぞれ性格や個性は様々で、それらをふまえた班構成や司会役の選定を行うのは困難である。グループ内の議論が深まらなかった場合も想定して、講師はあらかじめ参加者全体で共有すべき知見をまとめておき、グループワークの最後に提供することが必要であろう。

そのほか、保有資格別に評価が異なるか否か検討するため、母数が多い看護師と介護福祉士について比較したが、これらの資格別の結果は地域により様子が異なり、特徴は見受けられなかった（表 17－1、17－2）。

ケアマネジャーの役割に関する研修（A）への主な感想・意見を表 18 にまとめた。ビデオを利用した研修はわかりやすく良かった、グループワークは色々な意見が参考になる、という意見があり、印象に残った事柄が述べられているが、一方、グループワークの記録が不十分、時間が不足している、討議内容に専門家からのアドバイスがほしい、具体的な事例が見たい、といった要望もあげられている。なかでも、様々な職種への住宅改修研修の重要性を指摘したものが多く、多職種による連携の重要性を感じている人が多い。また、松戸市の研修において、各グループが記入した主な内容を整理したものが表 20 である。第1話から第3話まで、論点メモに添って各グループで討議がなされたが、おおむね内容は重複している。さまざまな現場での体験を学ぶ手だてとして、これらのグループワークで交換された情報を今後も整理し、蓄積していくことが望まれる。

3）課題分析・ケアプランの作成のための研修（B）の評価

Bタイプの研修は宮崎市、延岡市、佐倉市の3箇所で行ったが、グループワークの総合評価を見ると、「とても役立ちそう」が宮崎市 31.9%、延岡市 47.4%、佐倉市 78.1%であり地域差が大きい（表5）。これは、最初に行った宮崎市ではケアプランを幅広く捉えたため的が絞りづらかったという反省をもとに、延岡市ではグループワークの進め方を工夫し、住宅改修に関わるアセスメントを行うよう伝えたこと、さらに最後に研修を行った佐倉市では、「課題分析用ワークシート」という記入用シートを準備したために課題の絞込みや整理がしやすく議論がしやすかったことが影響していると思われる。また佐倉市では、この研修の前に動作を体験する研修（C）も行っており、住環境整備の重要性を肌で感じてからグループワークを行ったことも原因の一つにあるだろう。

研修内容の理解に関して聞いたところ、「住宅改修の意義」「住宅改修に関するケアマネの役割」については6～7割が「よく理解できた」としている（表8－1）。このテーマについては主に、宮崎市、延岡市では1日研修の午前中の講義で、また佐倉市では3回の半日研修を行ったため1回目の研修において説明されたが、おおむね理解されたと思われる。一方、「住宅改修

を失敗しない進め方」「アセスメントの方法」については、「よく理解できた」とする人が約２～５割であり（表８－２）、地域ごとに異なっている。これらの視点は経験により身についてくると思われるが、研修でも効果的に学べるよう、たとえばアセスメントのプロセスを共有するなど、さらに研修内容の検討が求められている。

グループワークについては、「住環境と自立に関する考え方が参考になった」が約５～6 割、「他者の意見が参考になった」が約６～８割と多い（表９）。とくに佐倉市では、「他者の意見が参考になった」が約８割と多く、「事例の共有化がはかれなかった」が０％であったことが特徴的である。これは先にも述べたように、課題分析をするための記入用シートを準備したことが影響していると考えられ、考えやすいシートを用意することが、円滑なグループ討議に役立っている。また「議論する時間が不足」が佐倉市で多かったが（表９）、実際に時間が不足していると同時に、活発な議論がなされ他者の意見が参考になったため、さらに話を聞きたいという意欲の表れとも考えることができる。

住宅改修への関わり方の変化については（表12)、「住環境の視点からのアセスメントの必要性を感じた」が約５～７割、「ケアマネジャーが関わる意義をより感じた」が約５～６割と多く、研修を通じて住環境整備の重要性を認識している。ただし、「ケアマネジャーの役割がはっきりした」は約３～４割であり、他の専門職の関与などが難しい場合にどこまでをケアマネジャーの役割と考えるか、地域のアドバイザーなどの支援体制の整備状況と合わせてケアマネジャーの役割を考えていくことが必要とされている。また、「住宅改修に積極的に関わろうと思った」は約２～３割で、「住宅改修に関わる負担感が減少した」はいずれも 15%に満たない。研修のみでは、負担感等の減少にはなかなか結びつかないことがうかがえる。

また、ケアマネジャー業務の状況別に見ると、実際のケアマネジャー業務についていない人は、課題分析というテーマの研修の場合はやや評価が低い。たとえば延岡市、宮崎市では専任や兼任のケアマネジャーでは、５～６割が「今回の研修が業務にとても役立ちそう」と答えているが、ケアマネ業務についていない人はそれぞれ約１割、３割に過ぎない。佐倉市の参加者はほぼ全員が実際に業務についているため、関心が高く、研修の評価も高かったことがうかがえる。

そのほか、Ａタイプの研修と同様に、研修の全体の参加人数が少ないほうが評価は高い（表３)。宮崎市は 191 名、延岡市 78 名、佐倉市 32 名であった。グループワークを行う際には、発表の時間や発表時の相互の距離を考え、佐倉市のように 30 名程度が好ましいと思われる。

なお、Ｂの課題分析の研修においても、Ａのケアマネジャーの役割に関する研修と同様に、グループによる評価の差がきわめて大きかった。また、グループの人数やグループ構成員の資格要件等は評価と特に関連性が見受けられず、この点ではさらに詳細な比較検討が必要である。

課題分析に関する研修（Ｂ）への主な意見・感想を表 19 にまとめた。ここではグループワークの課題も多くあげられており、グループ分け、テーブル配置、記入用紙、記入方法、ケアプランの考え方、時間配分など多数のことがらについて、意見が上げられた。

４）動作の体験を取り入れた研修（Ｃ）の評価

佐倉市では、１回目の講義と３回目のグループワーク（研修Ｂ）の間に、動作を体験する研修（Ｃ）を行った。この研修がその後の業務に役立ちそうか聞いたところ、「とても役立ちそう」46.7%、「やや役立ちそう」40.0%であり、ほぼ役立つと回答していた（表４)。また研修の感想としては、「自立支援のアセスメントの視

点・方法が理解できたか」「移動障害の見方が理解できたか」「動作と生活環境の関連性が理解できたか」といった項目について、いずれも「よく理解できた」が6～7割を占めており、自分で体験することで、自立支援の重要性や動作への理解が深まっている（表10）。特に、「動作と生活環境の関連性」に関しては、「講義だけでも十分理解できた」とする人は13.3%に過ぎず、体験の効果があったことがうかがえる（表13）。また「住環境の視点からのアセスメントの必要性を感じた」「実際にやってみることで生活環境の影響の大きさを理解できた」「改修する際には事前に動作を試すことが重要であることが理解できた」の各項目についても約7割が「はい」と回答しており、住環境整備の重要性および、環境整備における動作確認の重要性についてもおおむね理解している（表13）。

そのほか、「「していること」と「できること」に生活環境が影響していることが理解できた」は46.7%であり、いすの高さや手すりの位置など限られた場面での体験では、「している動作」と「できる動作」の相違を多様な場面で考えさせるには至っていなかった（表13）。

また、「住宅改修に積極的に関わろうと思うようになった」「住宅改修に関わる負担感が減少した」は他の内容の研修と同様に約1割程度と少なかった。体験については、「時間がかかりすぎ。全員でなくてもよかった。講義をもっと聞きたかった」という意見もあり、講義やグループワークとの組み合わせで、いかに研修効果をあげるかが今後の課題であろう。

5）今後希望する研修の内容

今後どのような研修を希望するか聞いたところ、「アセスメントの仕方」「難しい事例の紹介」「動作への環境の影響を体験」が約4～6割と多い。今回の研修A、Bで行った「グループによる事例検討」は1～2割程度であり、さらに体験を希望する人はそれほど多くない。（表14）

地域別に見ると、希望する研修の内容には地域差があり、すでに実施した研修の内容や日頃の業務の内容など、地域特性が反映していると思われる。たとえば、宮崎市では上記に加えて「理由書の書き方」「住宅改修の手段・技術」などのテーマも約4割が希望している。地域の要望に応じて、必要とされている研修内容を組み立ててゆく必要がある（表14）。

松戸市について、職種別に希望する研修内容を見ると、介護福祉士は特に「難しい事例の紹介」が多く、看護師等は「動作の体験」がもっとも多い。しかし他の地域では状況が異なり、職種別に同じ傾向が見られるわけではない。

同じく松戸市で、住宅改修への関与経験別に希望する研修内容を見ると、ここ1年の住宅改修への関与経験が「0件」の人は「アセスメントの仕方」が特に多く、そのほか「難しい事例の紹介」「動作への環境の影響を体験」など様々な研修を必要としている（表16）。また、住宅改修への関与経験が「10件以上」と経験の豊富な人は「難しい事例の紹介」「動作への環境の影響を体験」等が比較的多く希望されているが、中には「アセスメントの仕方」を望む人もおり、人により様々な研修を望んでいることがわかる。

4．研修主催者による工夫と発展例

1）現任研修（基礎Ⅰ）で自由に活用された研修例

北海道では、介護支援専門員の現任研修について実施要綱を定め、それぞれの課程についての研修課目・時間数・目的・内容に関する大枠が示されており、その具体的な実施については14支庁の各保健福祉事務所がその枠組の中で計画し実施している。「福祉用具・住宅改修」については、基礎課程Ⅰの「サービスの活用と連携」（7時間以上）のなかで7つのサービスの1

つとして位置づけられている。

平成16年度の現任研修を実施するにあたり、道介護保険課より住宅改修の研修用ビデオとして本研究班で作成したもの（第一巻、第二巻）が紹介され、各支庁の研修実施計画での活用がそれぞれ検討された。その結果、14支庁のなかで半数にあたる7支庁において当該ビデオ（すべて第一巻。第二巻も併せて活用した支庁が1か所あり）の活用が計画された（表 11)。本研究班より、ビデオ製作のねらいと一般的活用例、および演習用資料（グループワーク記録用紙、論点メモ：本報告書資料参照）を送付し、実施計画をつくる援助を行った。ただし実施にあたっては自由に活用していただけるよう依頼した。さらに、実施概要および実施後の評価についてのアンケートも送付し回答を依頼した。

ビデオを活用した研修を実施した7支庁のなかで5支庁からアンケートの回答があった。研修課目の獲得目標は、「住宅改修におけるケアマネジャーの役割の理解」(B) といった比較的大きな目標から、「住宅改修のニーズ発見の視点やディマンズとの調整方法」(A) (C) というビデオ第一巻の作成意図に絞り込んだ目標があった。さらに住宅改修についての課目ではなく「ＩＣＦとケアマネジメント」のなかでニーズとディマンズの相違を確認する目的でビデオが活用された例 (D) があった（表 12)。ビデオの活用方法については、「ICF とケアマネジメント」のなかで活用されたＤでは冒頭の解説部分（5分）のみが放映されたが、その他の「住宅改修」として位置づけられたものでは、冒頭解説のほかに、第一話から第三話までのエピソードが放映された。課題の絞込みと時間的制約のなかで、それぞれ異なった選択がなされていた (表 13)。Ｂでは第一話から第三話まですべてのエピソードが放映され、それぞれについてグループ討議がなされた（記録用紙、論点メモを活用)。Ａでは、第一話、第二話が放映され、その二つのエピソードについてグループ討議、発表がなされた（記録用紙、論点メモ使用)。Ｃでは第一話が放映され、それについてのグループ討議と発表がなされた(論点メモ使用)。ビデオ放映の前に、住宅改修・福祉用具に関する講義 (A)、住宅改修におけるケアマネジャーの役割についての説明 (B) がなされていたが、C ではとくに何も実施せずビデオ放映だけで完結されていた。

実施後の評価に関して、まず獲得目標の達成度については、「グループ討議・発表で意見を出し合うことで、ニーズの考え方や捉え方についての視野が広がった」(A)、「経験の乏しい受講者が経験を共有する話し合いをする際にビデオの活用が有効」(B) といった評価がある一方で、「気づきはあったが、実際の仕事に具体的に活かすのは難しい」という結論になり、達成度は半分程度 (C) という評価もあった（表 14)。

ビデオの使い勝手としては住宅改修をテーマとして実施した3例はいずれも「時間的にはちょうど良い」との回答であった（表 14)。今後ビデオを活用した研修の実施意向については、4 例で「実施したい」とするものであった（表 14)。

以上の結果から、第一巻については、ビデオ活用の研修目的、活用マニュアル（資料）が提供されれば、それぞれの研修主体の獲得目標や時間配分などに応じた実施計画が立てられる可能性は高いものと考えられる。グループ討議や発表をとおして、ニーズ発見の方法あるいはディマンズとニーズの調整方法についての経験を共有することについては少なくともビデオが有効に機能していることがうかがえる。多忙な業務に追われるケアマネジャーが、実際の業務でどのように実践できるかという点が消化不良であったという評価もあるが、その回答はまさに現在の業務環境全体の問題に関わっているので

あって、簡単に解答が出せるものではないのであろう。現場での工夫を少しでも共有し、その限界も共有することで制度的な改革へと働きかけることも視野に入れる必要があろう。

なお、今回、住宅改修というテーマに直接は無関係な研修でビデオが活用された例があった。ビデオを視聴した専門職の感想の中にも、住宅改修という切り口ではあるがその中身はアセスメントの方法、あるいはケアマネジャーの生活ニーズ発見の方法について考えられるものという評価があった。後のロールプレイを組み込んだ研修も、初回訪問における面接方法といった位置づけといってよい。第一巻は、住宅改修に限定されることなくケアマネジャーの支援方法論の課目において活用の可能性があると考えられる。そのなかで、自立支援としての住環境整備の視点をあわせて理解できる機会を提供することも、活用方法の選択肢として位置づけられるのではないか。

2）ロールプレイを組み込んだ町実施の研修例

北海道沼田町では、介護支援専門員の資質の向上を図ることを目的にケアマネジメントリーダー活動支援事業を平成 15 年度から実施してきた。平成16 年度ではアセスメント技術に焦点をあて、とくに面接技術と課題分析技術の向上を獲得目標とした研修を実施することとした。その方法として事例演習に当該研究班が作成したビデオを用い、面接技術の向上については第一巻の事例を用いてロールプレイを組み込んだ演習を実施した（表 15)。なお、課題分析技術については別途、第二巻を活用して居宅サービス計画書の作成演習を計画している。

面接技術の向上を獲得目標とした演習は、沼田町に在勤のケアマネジャー全員（2 名)、町保健指導班の保健師全員（3 名)、栄養士（1 名)、町在宅介護支援センター介護福祉士（1 名）を対象に（合計 7 名)、町在宅介護支援センター保健師の進行で平成 17 年 1 月 19 日 2 時～5 時に実施された。参加者はこの他に、深川保健所の保健師 2 名が助言者として加わった。会場は沼田町健康福祉総合センターのホールで、在宅介護支援センターの展示スペースに置かれているベッド、トイレコーナー、浴室コーナーを配置して、ロールプレイの舞台とした（写真)。

はじめに、進行役が今回の研修（演習）のねらい（面接技術の向上）を説明し、ロールプレイの進め方を示した（10 分程度)。ビデオ第一巻の第一話に登場する事例を用い（表 16)、本人、家族（夫)、ケアマネジャーのそれぞれの配役を換えて 3 回程度演じ、その都度気づいた点（とくに良かった点）を述べ合う。最後にビデオ第一話を視聴し、初回訪問の面接技術について議論する、というものである。

初回は、訪問経験のある在宅介護支援センターの介護福祉士がケアマネジャー役となり、二人の本物のケアマネジャーが本人役、夫役となり、ケアマネジャーの初回訪問の場面を演じた（5 分程度)。その後ただちに、感想などを述べ合い（10 分程度)、それを踏まえて二回目～四回目のロールプレイ、意見交換を繰り返した。配役の決定、休憩などを含めて、4 回のロールプレイと意見交換で 135 分程度であった。最後にビデオ第一巻の第一話を視聴（10 分)、感想を述べ合った。

ロールプレイ後の意見交換でのポイントは、「何のための訪問か、目的をはっきりとわかりやすく伝えること」「本人、家族の双方からバランスよく聞く姿勢」「間のとりかた」「本人の動作の確認（実際にやってもらうこと)」「現時点と同時に入院前の暮らし方についても聞き取る」「踏み込んで聞くときのきっかけ・言葉（問いかけ)」などがあげられた。とくに、この事例についての分析として「していること」と「できること」に差が大きい点があげられ、「できる

こと」を「しなくなっている」原因を探ることが重要との指摘があった。

以上のように、沼田町の研修では、住宅改修についての支援技術を学ぶことが直接の目的ではなく、ケアマネジャーのアセスメント技術、とくに面接技術の向上を目的としてビデオ第一巻が活用された。参加者が少数であり環境条件も整っていたこともあって、ロールプレイを用いた密度の高い演習が行われた。ビデオ第一巻の第一話を取り上げ、それを視聴する前に、その役割を自らが演じることによって、日ごろの訪問のやり方を振返り、課題を確認することに役立っていたように見受けられた。一般的な居宅支援の初回訪問に共通する面接技術のポイントが挙げられ、そのなかに、動作の確認の必要性、「していること」と「できること」の相違などが指摘されていたことが重要であろう。住環境整備の研修であれば、動作の確認の必要性、「していること」「できること」の相違が強調されるのは一種の必然であり、研修の中での指摘にとどまってしまう（実際の業務では忘れ去られる）可能性がある。一般的なアセスメントの方法論に、自立支援という観点から、住環境を同時に観察し動作を実際に確認する方法が位置づけられる必要がある。

第一巻では三つのエピソードを独立的に用いて、事例検討を行うことも可能である。その際に、住宅改修をテーマとする研修としてだけでなく、ケアマネジャーの支援方法とくにアセスメント技術を獲得目標とする研修・演習にも活用される可能性が示唆された。使用方法も、視聴後のグループ討議というものだけでなく、ロールプレイなどを導入することによって、さらに理解しやすいものになることが考えられる。

5．まとめ

本稿では、昨年度開発した研修用ビデオおよび本年度開発した動作体験用の小道具等を用いて、ケアマネジャー向けの住宅改修研修を行い、その評価を把握することで、ビデオや小道具等の研修用ツールの有効性を把握すると共に、効果的な研修のあり方を検討した。研修は大きく３つの内容があり、A．ケアマネジャーの役割に関する研修（グループワーク）、 B．課題分析・ケアプランの作成に関する研修（グループワーク）、C．異なる環境条件で基本的な動作を体験する体験型研修である。A，Bはそれぞれ３地域、Cは１地域にて行われ、それぞれアンケート調査により、研修に関する評価を把握した。最後にそれらの結果をまとめる。

アンケート調査等の結果を見ると、A～Cのいずれの研修も「とても役立ちそう」「やや役立ちそう」と回答した人がほぼ９割以上を占め、おおむね研修は役立つと評価されている。Aタイプの研修では、グループワークに120分程度の十分な時間をかけた地域のほうが若干評価が高い。またグループワークのみの参加ではなく、講義とグループワークの両方に参加したほうが満足されている。ケアマネジャーの業務に就くと、多忙を極め、１日がかりの研修への参加が困難になる。Aタイプの内容は、ケアマネジャーの持つべき視点に関する基本的な事柄であり、ケアマネジャーとしての業務に就く前に、１日の時間をとって講義とグループワークを合わせて行えるとよいと考えられる。なお、所属するグループにより、グループワークや研修全体への評価に大きな差異が生じている。グループワークという少人数での演習の場合は、構成メンバーにより討議内容にばらつきが生じることはやむを得ないだろう。しかし市町村職員や、在宅介護支援センター職員が司会や記録を担当すれば、比較的リーダーシップを発揮しやすく、他の参加者の負担も軽減される。また、講師が最後に既存のグループワーク等で得られた知見

をまとめて提示することで、グループ間の討議内容の格差を埋めることができる。グループワークを行う際には、できるだけグループ間格差をなくすために、主催者側に様々な配慮が必要とされている。

Bタイプの研修は、ケアプランの作成を目的としていたが、「課題分析用ワークシート」という記入用紙を利用した地域では、グループ内で議論がしやすくなりグループワークの評価が高かった。入浴、排泄など行為をしぼって討議したこともまとまった話ができる一因であろう。各自が実際に課題分析を行う際にも、このようなワークシートの記入は順序だったアセスメントの実施に役立つと思われ、今後の研修でも活用を進めて行くとよいだろう。ただしもっともグループワークの評価の高かった地域でも、「アセスメントの方法」をよく理解できたとする人は約4割にとどまっており、課題分析からどのようにケアプラン作成につなげて行くのか、具体的な流れに沿った指導が求められている。

Cタイプの体験型の研修は、動作と住環境の関わり、住環境整備の重要性、さらには環境整備の際に実際に動作を確認することの重要性などの理解に役立っていた。ただしいすからの立ち座りや手すりの位置などに動作場面が限定されるため、今後はさらに生活全般に渡り「していること」と「できること」の相違を見極める視点が身につくような研修も必要とされている。たとえば「していること」と「できること」に食い違いが生じている事例を紹介するなど、具体的な事例を学ぶ研修のあり方などについても検討が必要であろう。

今後、希望する研修の内容については、「アセスメントの仕方」「難しい事例の紹介」「動作への環境の影響を体験」などが約4～6割と多いが、地域により若干異なっている。「グループワークによる事例検討」を希望する人は1～2割と、さらにグループワークを希望する人は少ないが、グループワークをすることで、自らの取り組みを振り返ったり、他の人から学ぶことができたとされている。講義で学べることと、グループワークで意見交換をする中で学べることの相違についてはさらに吟味した上で、研修のプログラムを考えていく必要があるだろう。

またさらに、これらの研修用ツールを用いた研修が地元講師のみで実施できる可能性を検討するため、北海道地域の一部の支庁にビデオを利用した研修を工夫して行ってもらった。ビデオ活用の研修目的、活用マニュアル（資料）等が提供されれば、それぞれの研修主体の獲得目標や時間配分などに応じて研修の実施計画が立てられる可能性は高いものと考えられる。グループ討議や発表をとおして、ニーズ発見の方法あるいはディマンズとニーズの調整方法についての経験を共有することについては少なくともビデオが有効に機能していることがうかがえる。またアセスメント技術の向上に役立てるためにビデオと合わせてロールプレイを取り入れるなど、独自の工夫を取り入れて、有効に活用された例も見受けられ、さらなる普及が期待できる。

謝辞：本研究をまとめるにあたり、研修の開催にご協力いただいた各自治体・関連機関の職員および関係者の皆様、研修に参加された介護支援専門員等の多くの皆様に大変お世話になりました。記して深謝する次第です。

表１　各地域における研修の概要

研修の種類	地域	日時・場所（（　）内はｸﾞﾙｰﾌﾟ討議※の時間数）	担当講師（所属）	参加人数 アンケート回答数 ｸﾞﾙｰﾌﾟ構成（グループ内の回答者人数）	テーマ 司会・班分け 研修の位置づけ
ケアマネの役割に関する研修A	松戸市	2004年 5/19 前回講義のポイントと演習 14:10　～16:15 （100分） 場所：松戸市	鈴木晃氏 （国立保健医療科学院）	・ｱﾝｹｰﾄ回答者79人、 ・ｸﾞﾙｰﾌﾟ構成： 7～10人×10グループ	・前回講義(2/24)のテーマ：アセスメントの視点と技術―自立支援のための適正な住環境整備について―、今回はポイントのみ確認 ・演習のねらい：「ニーズ発見」「ニーズとディマンズの調整」についてどのような機会にそれが可能となるか経験等を交えて議論し今後の仕事に生かす。演習用ビデオ第1巻1,2,3話を利用。 ・司会：事前に各班の司会・全体記録各2名を割り当て ・位置付け：松戸市単独事業「事業者研修会」（年間6回程度）
	福島県	2004年 9/24 講義 10:05～12:10 演習 13:08～15:10 （122分） 会場：会津若松市	鈴木晃氏 （国立保健医療科学院）	・参加者80名 ・内訳：ｹｱﾏﾈｼﾞｬｰ・在宅介護支援センター相談員・市町村介護保険担当者等が計63名（居宅41名、施設13名、市町村担当者9名）、福祉用具・住宅改修相談員6名、会津保健福祉事務所職員2名、事務局9名 ・ｱﾝｹｰﾄ回答者51人 ・ｸﾞﾙｰﾌﾟ構成：午後は欠席があり6～7人×8ｸﾞﾙｰﾌﾟ	・講義テーマ：住環境整備の意義とケアマネジャーの役割－自立支援としての住宅改修はうまくいっているのか－ ・演習のねらい：「ニーズ発見」「ニーズとディマンズの調整」についてどのような機会にそれが可能となるか経験等を交えて議論し今後の仕事に生かす。演習用ビデオ第1巻1,2,3話を利用。 ・司会：市町村職員、記録：在宅介護支援センター職員 ・班分け：市町村担当者、施設と居宅、在宅介護支援センターなどが概ね均等に入る。 ・位置付け：福島県介護実習・普及センター「福祉用具・住宅改修相談事業研修会」 ・その他：当日は介護支援専門員現任研修担当者・講師に参加してもらい次年度以降のビデオ活用研修実施の可能性を検討していただく。
	富山県	2004年 11/2 講義 13～15:05 演習 15:15～16:30 （75分） 会場：富山市	鈴木晃氏（国立保健医療科学院）	・参加者148名 ・内訳：ｹｱﾏﾈｼﾞｬｰ・実務経験1年未満の者がほとんど・市町村や厚生センター職員10数名 ・アンケート回答者136名 ・ｸﾞﾙｰﾌﾟ構成：4～7人×25ｸﾞﾙｰﾌﾟ	・講義テーマ：住環境整備の意義とケアマネジャーの役割－自立支援としての住宅改修はうまくいっているのか－ ・演習のねらい：「ニーズ発見」についてどのような機会にそれが可能となるか経験等を交えて議論し今後の仕事に生かす。演習用ビデオ第1巻1,2話を利用。 ・司会：事前に各班の司会・全体記録各2名を割り当て ・位置付け：富山県ケアマネジャー現任研修（基礎研修Ⅰ）「住宅改修」 （午前中にリハビリテーションと福祉用具を別講師が担当）

表１　各地域における研修の概要（続き）

研修の種類	地域	日時・場所（()内はｸﾞﾙｰﾌﾟ討議※の時間数）	担当講師（所属）	参加人数 アンケート回答数 ｸﾞﾙｰﾌﾟ構成（グループ内の回答者人数）	テーマ 司会・班分け 研修の位置づけ
課題分析に関する研修B	宮崎県	2004年8/23 講義 9:30～12:00 演習 13～16:10 会場：宮崎市	鈴木晃氏（国立保健医療科学院）	・アンケート回答者191人 ・グループ構成：4～9名×24ｸﾞﾙｰﾌﾟ	・講義テーマ：住環境整備の意義とケアマネジャーの役割－自立支援としての住宅改修はうまくいっているのか－ ・演習のねらい：居宅サービスを立てる際に自立支援の視点からアセスメントを行い、住宅改修や福祉用具を含めたプランの重要性・意義を確認する。演習用ビデオ第２巻を利用。 ・司会：事前に各班の司会・全体記録各２名を割り当て ・位置付け：宮崎県ケアマネジャー現任研修（基礎研修Ⅰ） ・その他：当日は介護実習普及センター職員に参加してもらい次年度以降のビデオ活用研修実施の可能性を検討していただく
	宮崎県	2004年8/24 プログラムは同上 会場：延岡市	鈴木晃氏（国立保健医療科学院）	・アンケート回答者78人 ・グループ構成:4～6人×15ｸﾞﾙｰﾌﾟ	・宮崎市（上記）と同様
	佐倉市③回目	2005年1/13 講義と演習 13：30～16：30 会場：佐倉市	橋本美芽氏（都立保健科学大学）	・参加者：ｹｱﾏﾈｼﾞｬｰ37名 ・アンケート回答者32名 ・ｸﾞﾙｰﾌﾟ構成6～7名×6	・講義と演習：自立支援に向けた居宅サービス計画立案のために ・演習のねらい：居宅サービス計画の立案作業を通して、住環境整備（生活と環境の関係性）のアセスメントの方法を理解する。演習用ビデオ第２巻を利用。 ・司会・班構成：同一事業所の参加者は別グループ、経験年数が偏らないよう配慮、佐倉市介護保険課職員１名が加わり司会・書記・発表者の役割分担等の誘導。 ・位置付け：県介護サービス適正化実施指導事業の「ケアプラン指導研修事業」（全６回。うち３回を住宅改修関連で実施）
講義型研修	佐倉市①回目	2004年9/16 講義 14:05～16:00 会場：佐倉市	鈴木晃氏（国立保健医療科学院）	・事前アンケート回答者43名、事後アンケート回答者39名、施工者約30名（施工者はアンケートなし）	・講義「住環境整備の意義とケアマネジャーの役割－自立支援として住宅改修はうまくいっているか－ ・講義のねらい：住環境整備（住宅改修・福祉用具）の意義は自立支援、ケアマネジャーの役割はアセスメント・実現化・モニタリングを理解する
体験型研修C	佐倉市②回目	2004年11/11 講義(鈴木氏) 14：05～14：23 講義(岩本氏)14：23～15：17 体験動作とまとめ 15：20～16：22 会場：佐倉市	鈴木晃氏（国立保健医療科学院）、岩本絵己氏（佐倉市健康増進課）	参加者：ｹｱﾏﾈｼﾞｬｰ36名（事後アンケート記入者31名）、施工者13名(施工者はアンケートなし)	講義と体験学習：移動障害の見方と住環境整備の考え方 講義・体験のねらい：していること、できることはちがうということの理解。 体験：参加者(約60名)を３つに分け15分×3ヶ所にて体験用小道具の利用。①いす－座面高さ・角度を変えて、また足元を引けない状態にして立ち上がりを体験（担当者がいすの操作説明）。製作したいすのほかにも多様ないす・腰掛を用意し立ち上がりを自由に試す。②縦手すりといすの位置を変えて、いすからの立ち上がりが最も容易な位置を探す（担当者が体験指導）③斜め手すりの角度を変えて、いすからの立ち上がりが最も容易な角度を探す（担当者が体験指導）

※グループ討議の時間数にはグループ討議のねらいの説明、ビデオの視聴および発表の時間も含めている

表2 ケアマネジャーの役割に関する研修(A)の総合評価

	回答者数	今回の研修は業務に役立つか					
		とても役立ちそう	やや役立ちそう	どちらともいえず	あまり役立ちそうにない	まったく役立ちそうにない	無記入
松戸(人)	79	37	37	5	0	0	0
(%)	100.0%	46.8%	46.8%	6.3%	0.0%	0.0%	0.0%
福島(人)	51	30	16	1	0	0	4
(%)	100.0%	58.8%	31.4%	2.0%	0.0%	0.0%	7.8%
富山(人)	136	70	59	4	0	0	3
(%)	100.0%	51.5%	43.4%	2.9%	0.0%	0.0%	2.2%

表3 課題分析に関する研修(B)の総合評価

	回答者数	今回の研修は業務に役立つか					
		とても役立ちそう	やや役立ちそう	どちらともいえず	あまり役立ちそうにない	まったく役立ちそうにない	無記入
宮崎(人)	191	91	77	6	1	0	16
(%)	100.0%	47.6%	40.3%	3.1%	0.5%	0.0%	8.4%
延岡(人)	78	43	24	3	0	0	8
(%)	100.0%	55.1%	30.8%	3.8%	0.0%	0.0%	10.3%
佐倉(人)	32	19	6	2	0	0	5
(%)	100.0%	59.4%	18.8%	6.3%	0.0%	0.0%	15.6%

表4 佐倉市体験型研修(C)および講義型研修の評価

	回答者数	今回の研修は業務に役立つか					
		とても役立ちそう	やや役立ちそう	どちらともいえず	あまり役立ちそうにない	まったく役立ちそうにない	無記入
佐倉体験研修(人)	30	14	12	4	0	0	0
(%)	100.0%	46.7%	40.0%	13.3%	0.0%	0.0%	0.0%
佐倉講義研修(人)	38	26	9	0	0	0	3
(%)	100.0%	68.4%	23.7%	0.0%	0.0%	0.0%	7.9%

表5 グループワークの総合評価

	回答者数	今回の研修は業務に役立つか					
		とても役立ちそう	やや役立ちそう	どちらともいえず	あまり役立ちそうにない	まったく役立ちそうにない	無記入
宮崎(人)	191	61	100	22	2	0	6
(%)	100.0%	31.9%	52.4%	11.5%	1.0%	0.0%	3.1%
延岡(人)	78	37	32	7	0	0	2
(%)	100.0%	47.4%	41.0%	9.0%	0.0%	0.0%	2.6%
佐倉(人)	32	25	7	0	0	0	0
(%)	100.0%	78.1%	21.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

表6 体験学習の総合評価

	回答者数	体験学習が業務に役立ちそうか				
		とても役立ちそう	やや役立ちそう	どちらともいえず	あまり役立ちそうにない	まったく役立ちそうにない
佐倉体験研修(人)	30	15	13	2	0	0
(%)	100.0%	50.0%	43.3%	6.7%	0.0%	0.0%

表7　ケアマネジャーの役割に関する研修(A)の項目別評価

	回答者数	グループ討議についてあてはまること(複数回答)							
		ケアマネ業務のあり方を考える機会になる	住宅改修研修としてはものたりない	ニーズやディマンズ調整が参考になる	事例が現実的でなく参考にならない	他者の意見や考え方が参考になる	自分の意見を伝えるのが難しい	議論する時間が不足	共有化図れず
松戸(人)	79	50	13	44	10	55	11	11	2
(%)	100.0%	63.3%	16.5%	55.7%	12.7%	69.6%	13.9%	13.9%	2.5%
福島(人)	51	32	3	−	−	34	−	10	4
(%)	100.0%	62.7%	5.9%	−	−	66.7%	−	19.6%	7.8%
富山(人)	136	77	8	−	−	78	−	41	7
(%)	100.0	56.6%	5.9%	−	−	57.4%	−	30.1%	5.1%

表8-1　課題分析に関する研修(B)および講義の項目別の理解(1)

	回答者数	研修の内容が理解できたかどうか							
		住宅改修に関するケアマネの役割				住宅改修の意義			
		よく理解できた	少し理解できた	あまり理解できなかった	無記入	よく理解できた	少し理解できた	あまり理解できなかった	無記入
宮崎(人)	191	119	69	1	2	135	55	1	0
(%)	100.0%	62.3%	36.1%	0.5%	1.0%	70.7%	28.8%	0.5%	0.0%
延岡(人)	78	52	25	0	1	57	19	1	1
(%)	100.0%	66.7%	32.1%	0.0%	1.3%	73.1%	24.4%	1.3%	1.3%
佐倉(人)	32	16	11	0	5	17	9	0	6
(%)	100.0%	50.0%	34.4%	0.0%	15.6%	53.1%	28.1%	0.0%	18.8%
佐倉講義研修(人)	38	25	12	1	0	29	8	1	0
(%)	100.0%	65.8%	31.6%	2.6%	0.0%	76.3%	21.1%	2.6%	0.0%

表8-2　課題分析に関する研修(B)および講義の項目別の理解(2)

	回答者数	研修の内容が理解できたかどうか								
		住宅改修を失敗しない進め方				アセスメントの方法				
		よく理解できた	少し理解できた	あまり理解できなかった	無記入	よく理解できた	少し理解できた	あまり理解できなかった	まったく理解できなかった	無記入
宮崎(人)	191	96	89	5	1	58	118	12	0	3
(%)	100.0%	50.3%	46.6%	2.6%	0.5%	30.4%	61.8%	6.3%	0.0%	1.6%
延岡(人)	78	30	45	1	2	22	45	6	0	5
(%)	100.0%	38.5%	57.7%	1.3%	2.6%	28.2%	57.7%	7.7%	0.0%	6.4%
佐倉(人)	32	7	17	2	6	12	16	0	0	4
(%)	100.0%	21.9%	53.1%	6.3%	18.8%	37.5%	50.0%	0.0%	0.0%	12.5%
佐倉講義研修(人)	38	12	23	1	2	7	13	7	1	10
(%)	100.0%	31.6%	57.9%	2.6%	5.3%	18.4%	34.2%	18.4%	2.6%	26.3

表9　課題分析に関する研修(B)の演習の感想(複数回答)

	回答者数	「住環境と自立」に関する考え方が参考に	「住環境と自立」に関する考え方にとまどっ	共有化図れず	他者の意見が参考	議論する時間不足
宮崎(人)	191	106	31	32	108	61
(%)	100.0%	55.5%	16.2%	16.8%	56.5%	31.9%
延岡(人)	78	49	6	9	54	20
(%)	100.0%	62.8%	7.7%	11.5%	69.2%	25.6%
佐倉(人)	32	17	3	0	26	18
(%)	100.0%	53.1%	9.4%	0.0%	81.3%	56.3%

表10 体験型研修の感想

	回答者数	移動障害の見方が理解できたか		動作と生活環境の関連性が理解できたか		自立支援のアセスメントの視点・方法が理解できたか	
		よく理解できた	少し理解できた	よく理解できた	少し理解できた	よく理解できた	少し理解できた
佐倉体験研修(人)	30	23	7	22	8	19	11
(%)	100.0%	76.7%	23.3%	73.3%	26.7%	63.3%	36.7%

表11 ケアマネジャーの役割に関する研修(A)後の変化

	回答者数	考え方が変わったか(複数回答)							
		ケアマネが関わる意義をより感じた	ケアマネの役割がはっきりした	住宅改修に積極的に関わろうと思った	住環境の視点からのアセスの必要性を感じた	住宅改修に関わる負担感が減少	住宅改修に関わる負担感が増加	考え方は変わらず	無回答
松戸(人)	79	−	32	29	−	6	5	14	6
(%)	100.0%	−	40.5%	36.7%	−	7.6%	6.3%	17.7%	7.6%
福島(人)	51	29	25	7	37	6	−	2	−
(%)	100.0%	56.9%	49.0%	13.7%	72.5%	11.8%	−	3.9%	−
富山(人)	136	68	62	27	101	10	−	3	−
(%)	100.0%	50.0%	45.6%	19.9%	74.3%	7.4%	−	2.2%	−

表12 課題分析に関する研修(B)後の変化

	回答者数	考え方が変わったか(複数回答)							
		ケアマネが関わる意義をより感じた	ケアマネの役割がはっきりした	住宅改修に積極的に関わろうと思った	住環境の視点からのアセスの必要性を感じた	住宅改修に関わる負担感が減少	住宅改修に関わる負担感が増加	考え方は変わらず	無回答
宮崎(人)	191	106	64	36	124	11	−	6	4
(%)	100.0%	55.5%	33.5%	18.8%	64.9%	5.8%	−	3.1%	2.1%
延岡(人)	78	42	26	17	53	3	−	3	1
(%)	100.0%	53.8%	33.3%	21.8%	67.9%	3.8%	−	3.8%	1.3%
佐倉(人)	32	20	12	9	17	4	−	1	4
(%)	100.0%	62.5%	37.5%	28.1%	53.1%	12.5%	−	3.1%	12.5%
佐倉講義研修(人)	38	20	16	10	24	3	−	2	1
(%)	100.0%	52.6%	42.1%	26.3%	63.2%	7.9%	−	5.3%	2.6%

表13 佐倉市体験型研修(C)後の関わり方の変化

	回答者数	考え方が変わったか(複数回答)							
		住宅改修に積極的に関わろうと思った	住環境の視点からのアセスの必要性を感じた	住宅改修に関わる負担感が減少	考え方は変わらず	実際にやってみることで、生活環境の影響の大きさを理解できた	動作と生活環境の関連性は、講義だけでも十分理解できた	「していること」と「できること」に生活環境が影響していることが理解で	改修する際には、事前に動作を試すことが重要であることが理解できた
佐倉体験研修(人)	30	11	22	4	3	22	4	14	22
(%)	100.0%	36.7%	73.3%	13.3%	10.0%	73.3%	13.3%	46.7%	73.3%